

# KELES Newsletter

## 関西英語教育学会報 2021年度 第2号

事務局：〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1

大阪教育大学 教育学部 教員養成課程 橋本健一研究室内

E-mail: kelesoffice@gmail.com 学会ウェブサイト: <http://www.keles.jp/>

2021年12月5日発行



### 関西英語教育学会 今後の行事のご案内

関西英語教育学会では年度末に向けて下記の行事を開催いたします。新型コロナウイルスの影響で引き続きオンラインとなりますが、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

#### ◆第53回KELESセミナーのお知らせ

第53回セミナーは「観点別評価—その本質と評価の実際」というテーマで下記の通り開催予定です。ご参加には事前申込が必要です。詳細は学会ウェブサイトでご確認下さい。

日時：2021年12月19日（日）13:00-16:30

形態：オンライン開催（Zoom利用）

資料代：会員 無料・非会員 1,000円

講師・講演タイトル：

今井 裕之 先生（関西大学）

中・高外国語科における「指導と評価の一体化」の課題 —資質・能力の評価とコミュニケーション能力の評価の間で—

増見 敦 先生

（神戸大学附属中等教育学校）

「主体的に学習に取り組む態度」の見取りと評価：言語活動の「振り返り」に関する実践から

竹下 厚志 先生（神戸市立葺合高等学校）

観点別評価のめざすものは？英語指導の方向性 —内容(contents)それとも技能(language/skills)?

#### ◆第25回卒論・修論研究発表セミナーのお知らせ

日程：2022年2月11日（金・祝）

形態：オンライン開催（Zoom利用予定）

参加費：会員・非会員とも無料

当日はスペシャル・トーク講師に吉田研作先生（上智大学名誉教授）をお迎えして、「日本の英語教育—金魚鉢から大海の道」というタイトルでご講演いただきます。卒業論文・修士論文を完成させた暁には、是非こちらで発表していただき、将来の英語教育を共に考える同志たちとの語らいの場としていただけたらと思っております。学生の研究指導をご担当の先生方におかれましては、ぜひ発表をお勧めいただけましたら幸いです。

発表申し込み締め切りは2022年1月21日（金）で、発表者はKELESの会員である必要はありません。詳細は同封のフライヤー・KELESウェブサイトをご覧ください。

両行事とも多数の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

## 報告 関西英語教育学会 第51回 KELESセミナー

共催：全国英語教育学会 英語教育セミナー

開催日：2021年9月26日（日） オンライン（Zoom）開催

新型コロナウイルスの影響でKELESの行事は引き続きオンラインで開催することになりました。第51回セミナーは全国英語教育学会の英語教育セミナーとの共催で、「複雑系理論から英語教育現場を考える」というテーマの下、立教大学の新多了先生、山本友香先生、Richard Sampson先生、渋谷教育学園幕張中・高等学校の小泉香織先生にご登壇いただきました。講師の先生方、企画段階から様々にご尽力いただきました理事の中田賀之先生（同志社大学）、共催行事としてご支援いただきました全国英語教育学会、そしてご参加くださった約80名の皆様に心から感謝申し上げます。以下、セミナー全体の報告を記します。

\*第51回セミナーについては、当日の動画を会員限定で公開させていただくこととなりました。詳細は最終ページをご覧ください。

### 第51回 KELESセミナー

複雑系理論から英語教育現場を考える

主旨説明：中田 賀之 先生（同志社大学）

#### 第一部

複雑系理論から見た中高大英語教育

講師：新多了先生・山本有香先生（立教大学）

小泉 香織 先生（渋谷教育学園幕張中・高等学校）

#### 第二部・ワークショップ

Complexity Thinking and Practitioner Research

ファシリテーター：

Richard Sampson 先生（立教大学）

まず新多先生からテーマである複雑系理論についてわかりやすくお話いただきました。複雑系理論とは一言で言うと「変化についての研究」で、世界を構成する複雑な現象とその変化

を説明する理論的な見方とされています。そのような現象は様々な要素の複雑な相互作用に基づき起こり、時間の経過とともに変化するという意味でも予測が難しいものです。複雑性の特徴的現象として複数要素の相互作用の結果生じる現象の「創発」、変化の「非線形性」、ある時点での突然の質的变化である「相転移」などが挙げられ、具体的な現象として気象や株価と共に言語学習が挙げられました。

複雑系理論のSLAへの応用はライティングや学習者心理学の分野で多く見られ、いくつかの研究例が示されました。教育現場への示唆として、学習者心理は常に変化しているがそのパターンは予測可能であること、複雑系としての学習者理解の重要性、そのような学習者理解に基づく教育方法の検討などを挙げられ、教師自身がComplex adaptive systemであることが大事というメッセージを送っていただきました。

続いて新多先生と山本先生から立教大学の英語カリキュラムについて、複雑系理論の考え方を背景にしつつお話しいただきました。立教大学の新しい英語カリキュラムでは、学び続ける主体的学習者の育成を主眼とする変容的教育観に基づき、世界がどのように変化しようとも生き抜いていくために必要な力を身につけさせるため、英語を使って何ができるか？という考えを基盤にした英語教育カリキュラムを構築されています。新多先生・山本先生からはより高度な英語力と思考力の養成を目的として導入された英語ディベート科目についての紹介がなされ、続いて山本先生からは学部専門のEMI科目につなげるための橋渡しとして導入されるCLILとCEFRを融合させた英語自由科目の開発について、パイロット科目を例にしてご紹介いただきました。

小泉先生からは勤務校での6ヵ年にわたる英語教育を通じて、英語力だけでなく課題解決能力、主体性、協働性、他者への寛容性など様々な力を身に付けさせる取り組みが紹介されました。6ヵ年を3ブロックに分け、基本的な練習を多用した基礎力の強化→オーセンティックな英語への接触を増やしての表現力の育成→専門性の高い内容を取り入れた高度な表現力と基礎的な交渉力の獲得という流れで、自分から進んで英語に取り組む学習者、相手を意識した言語使用者、信頼される国際人へと成長を促す実践は、チーム・個人が発する熱量に圧倒される思いでした。「違う個性を持つ個人が複雑に絡み合う教室という環境で、日々生徒に向き合い、彼らにできることを考えるよう教師自身が変容する」というお言葉は、セミナーのテーマである複雑系が中高教育実践において現場で体现される理想的な形の1つであるように思われました。

第二部はサンプソン先生によるワークショップで、複雑系の考え方を言語教育実践・研究に当てはめるとどうなるかということについて考える機会を提供していただきました。教室にいる学習者は「人」であり、様々な心理的状态・経験・考えを有しており、教室内で様々なインタラクションを起こす動的な存在であるという考え方にに基づき、実践者・研究者として現象をどう解釈するかという様々な事例の紹介はたいへん参考になるものでした。特にご自身あるいはこれまでに教えられた学習者の発言・行動がどのような「感情」に結びついているかということを常に問いかけられ、それを考えることは複雑な存在である学習者を理解する大きな一歩であると感じられた、たいへん有意義なワークショップでした。

(報告者：大阪教育大学 橋本 健一)

## 報告 関西英語教育学会 第52回 KELESセミナー

開催日：2021年11月7日（日） オンライン（Zoom）開催

続く第52回セミナーは「外国語学習における暗示的・明示的知識の役割」というテーマで、宮城教育大学の鈴木渉先生、福島大学の佐久間康之先生にご登壇いただきました。講師の先生方、そしてご参加くださった約70名の皆様に心から感謝申し上げます。以下、セミナー全体の報告を記します。

### 第52回 KELESセミナー

外国語学習における暗示的・明示的知識の役割

英語学習における暗示的・明示的知識

—日本の小中高大の英語教育への示唆—

講師：鈴木 渉 先生（宮城教育大学）

日本人の英語知識の長期的習得プロセス

—オンライン学習の実践—

講師：佐久間 康之 先生（福島大学）

鈴木先生のご講演では、小中高大における英語教育にとって、ご専門であるSLAがどのように貢献しうるかを明示的・暗示的知識の測定面、特にどのようなテストを作成・実施・採点できうるかについてお話いただきました。ご講演の前半には、最初に明示的知識が言葉で説明できる知識であり、暗示的知識は流暢に言語運用ができる技能であると簡単な定義をされ、我々英語教員にとっては、それらの知識が別次元であることを念頭に置き、それらを知識と技能として別個に測定することが必要であるとのことでした。そもそも、改訂後の小中高における学習指導要領に共通するのは「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」、「言語活動」、「コミュニケーション能力」というキーワードであり、従来のように文脈がない状態で個

別の文法事項を問うようなテストでは、これらのキーワードに沿った評価ができないことを問題提起となさいました。続いて、これまでのSLAにおいて、コミュニケーション能力がどのように定義されてきたか、Canale and Swain (1980)に始まり、Ellis (2004)の暗示・明示的知識に至るまでを概説され、たとえば日本の中学生が習うような文法項目でいえるように明示・暗示的知識で説明可能かを示されました。ご講演の後半では、明示・暗示的知識の測定方法について、それぞれ実践例を紹介いただきました。誤り訂正や空所補充に関しても、従来のものは実際のコミュニケーションを意図した目的・場面・状況といった文脈がないため、今後は実際のコミュニケーション場面を意識した形に改変することの重要性を指摘されていました。

続いて佐久間先生のご講演では、外国語学習について記憶の観点からお話をいただきました。前半はエピソード記憶、意味記憶、手続き記憶について概説いただき、泳ぎ方について知識を持っていても素晴らしい泳ぎができるとは限らず、泳ぎがうまくても、泳ぎ方をうまく説明できるとは限らないことについ

て、別個の記憶が働いていることを例示されました。後半は、顕在記憶と潜在記憶について解説いただき、繰り返し学習との親和性や、頑健性が異なることを足がかりに、覚えようが覚えまいが短い時間で数日に1回学習する潜在記憶的な学習が英単語の学習に効果的かについてのご研究を紹介されました。ご研究では大学生を対象に単語学習をした効果を検証され、ここでの単語学習の効果は、個別の学習到達度をリカートスケールで測られた結果と客観テストで計測されたものであるとのことでした。分析の結果、大学ごとに違う結果があるものの、概ね自己評定と客観テストの間には中程度の相関関係があり、学習効果は学習者の無意識のうちに高まってゆくこと、また毎日15分、100の単語を自己評価していれば、知識は積み重なってゆくのではないかと考察されました。今後は単語の持つ意味がポジティブかネガティブかなど、さまざまな要因によって学習効果が変わる可能性にも言及され、その後の質疑応答でも活発な議論に至っていました。

報告者：山形 悟史（関西大学第一中学校）

## 学会事務局からのお知らせ

### ◆各種お問い合わせフォームについて

<http://www.keles.jp/>

下記に関するお問い合わせは、学会ウェブサイト内のお問い合わせフォームから事務局にお知らせください。

学会費・学会誌・研究大会・各種セミナー・入退会・会員情報の変更・その他学会全般に関するお問い合わせ

### ◆第51回セミナーの動画アーカイブ

第51回セミナーについては、当日の動画を会員限定で公開させていただくこととなりました。セミナー当日ご都合がつかなかった方も、ぜひどのようなお話がなされたのか、ご覧いただけたら幸いです。KELESウェブサイトからアーカイブのページへ入っていただき、下記パスワードをご入力ください。（パスワードの会員以外の方への共有はお控えください。）

パスワード：Keles2021\_51seminar